

# 海外遠征2つの記録

台 湾  
フィリピン

-その1-

## 台湾合宿雑感

古 川 友 彦



私が2年生の秋合宿、ちょうど昭和41年度の春合宿に第4次沖縄遠征の計画をすすめていた頃、自分の胸の中に真の意味の外国でのなんらかの活動をしてみたいと思う気持ちがわいてきた。そしてなんとなく、近い海外韓国と中華民国にひかれるようになった。そして本屋、図書館で外国のガイドブック等読んで海外での活動を夢見ていた。しかしその頃はクラブとしては海外遠征といえは沖縄がやっとで自分でも可能性のない夢と想っていた。そして春になり西表島の縦走、石垣島での調査も終り石垣港をでる時急激に来春の活動はな

にがなんでも台湾でやろうという気持ちがわき起きてきた。そして3年生になった4月琉球海運に手紙を出し費用・運航回数等を聞き、第1に費用の面で台湾での合宿は可能と判断し徐々に心の中で計画を練り上げていった。自分がなぜ海外での合宿に熱中したかというのは、第1にこれからの活動は海外が主な舞台となる事、第2に新人が多数入部した事、第3にこれら新人に海外何するものぞという気持ちをうえつける事等の理由で何があっても一度外へ出て見ようと思うようになった。そして夏が来て北海道の合宿が終り9月のある日集会で全員来春の台湾での行動に賛成してくれ、3年1人2年1人1年4人という弱小メンバーながらなんとか計画を進める事ができた。

この計画を立案中に私がおかしたミスは、余りにも他の大学の資料というものに目をとおしていなかったため現地での複雑な事情を理解していなかった事である。

そしてそうこうしている内に年も明け後期の試験も終り出発の日がきた。

大阪から鹿児島・那覇・石垣島・基隆に向け出

発した。3月2日鹿兒島着、3月3日那覇着、天候不良の為3月6日那覇出発、3月7日石垣港着、3月8日基隆着これで予定より2日の遅れを生じた。税関の検査は異外と軽く我々はキスリングのひもをはずしただけ、しかしトランジスターラジオだけは非常にきびしかった。まず困ったのはやはり言葉、我々東回りで一周する予定が蘇花公路の不通の為、我々大幅に計画を変更しなければならなくなった。そしてビザの期限が2週間であった事。入国が2日遅れたが、帰りの船の出港日は決っている事。以上のような理由で協議の結果台中から霧社へ入り、濁水溪の原流を見、そして高砂族の生活を見ようという事になった。最初感じた事は海外では何をするにも国内の2倍以上の時間が必要であるという事であった。

台中からバスで埔里經由霧社へ向った。

霧社という所は濁水溪の上流に位置し、山々の急斜面に高砂族がアワ・ヒエ・果物等を作って生活している。彼等の生活用式は近年政府の保護の充実と共に急に向上した為か古い習慣と近代生活とが同居している。たとえば、家はレンガ作りの立派なものが多く一般の中国人のそれよりも良い物

が多い。それにもかかわらず、便所というものがなくどこでも用便をし、又くつははかずに素足で歩いているものが多い。彼等の農耕は焼畑農業で山を焼きそのあと作付し収穫すると、又別の土地へうつる。果実類の栽培は番布等の民俗手芸品と共に彼等の唯一の換金物である。彼等の間でも部落の重要な問題は若年層の都会への流出である。これは日本だけの問題ではないらしい。又首狩をはじめ古い風習等は、日本統治時代にすべて禁止され、今は祭り等の時にのみ首狩歌等が歌われる。古いかやぶきの家も5年前に姿を消し、楼という部落にただ一つ古いかやぶきの高倉があっただけである。又我々が注目していた濁水溪はさすが台湾一の川だけあり、すごく深い峡谷の下を激流をなして流れていた。

いずれにせよ今回の合宿ではやはりすべてが国内では全く味わうことのできないものであった。そして結果的には台湾という地に足跡を踏み残したという結果に終わったが、初めての海外遠征で得た貴重な経験は大きかった。機会あればもう一度訪台してもっともっと深いものを得たいと思っている。

ふるかわ・ともひこ（商学部学生）